

「極道の妻（つま）たち Neo」 ★★

2013（平成25）年6月8日鑑賞

<梅田ブルク7>

監督：香川秀之

鬼場琴音（鬼場満の妻）／黒谷友香

加藤アザミ（加藤修平の妻）／原田夏希

加藤修平（加藤組組長）／今井雅之

西澤サクラ（女子高生）／小池里奈

岸辺宗一郎（西京連合岸辺会会長）／石橋蓮司

金子（西京連合岸辺会会長補佐）／大杉蓮

鬼場満（鬼場組組長）／長嶋一茂

矢島晃司（アザミが愛した男）／袴田吉彦

2013年・日本映画・91分

配給／東映ビデオ

<『キネマ旬報』での評価は？>

『極妻』の復活には、『キネマ旬報』6月下旬号も、秋本鉄次氏が執筆した「あの『極妻』が帰ってきたー。『極道の妻たち Neo』へと至る“極妻・四半世紀余”の軌跡」と題する特集を組んで期待を寄せた（103～107頁）。しかし、同号の、「REVIEW鑑賞ガイド」では、西脇英夫・真魚八重子・三浦哲哉の三氏は、各1点、1点、2点と評価が低い。さてこれは・・・？

そう思いつつ、一方では、観ないことには評価ができないと考え、他方では、岩下志麻、十朱幸代、三田佳子、高島礼子の系譜を受け継いで、今回の『極妻』の主演を張る黒谷友香に期待して鑑賞したが・・・。

<この「つかみ」にビックリ！この「狂言回し」は？>

秋本鉄次氏が言うように、『極妻』シリーズの魅力は、何とんでも「その女っぷり、その啖呵、そのエロス」。また「1作目の冒頭、夫が服役中の極妻たちが“やもめ会”と称してのクラブ貸し切り大ドンチャン騒ぎシーンがのちの方向性を決めた」というのも、氏の言うとおりで。どんな映画でも最初のつかみが大切だが、1作目はまさにその点で成功したわけだ。

しかし、16作目となる本作冒頭のつかみは、鬼場満（長嶋一茂）の妻である、鬼場琴音（黒谷友香）と、渡世の義理によって鬼場が殺したヤクザ矢島晃司（袴田吉彦）の愛人で、今は加藤組組長加藤修平（今井雅之）の妻となっている加藤アザミ（原田夏希）との、女子高生・西澤サクラ（小池里奈）を間に入れてのやりとり。これがイマイチ、というよりNGに近い。真魚八重子氏が言うように、アザミの手に持つ、あのバカ長いキセルは一体ナニ？今どき、あんなものを使ってタバコを吸う人間がいるの？また、いかにも今風で中身がスッカラカンの女子高生サクラをストーリーの狂言回し役として使ったのは一体ナゼ？中盤からクライマックスにかけて、いちいちサクラが登場して解説してくれるたびに、こちらは白けていくことになる。さらに、全編にわたって一貫しているアザミの何とも芝居がかったセリフ回しは、一体ナニ？『極妻』だからといって、いつもあんな喋り方をしているわけではないだろうに・・・。

<本作にみる権力抗争は？>

「ヤクザ」か「極道」かの言葉づかいは別として、本作では、西京連合岸辺会会長・岸辺宗一郎（石橋蓮司）とその会長補佐・金子（大杉蓮）ら幹部たちは、一体どんなことをして飯を食っているのか全く見えてこない。また、「極道中の極道」と恐れられ、岸辺会長も一目置いている、武闘派の鬼場満が盛んに言う、「チャイナ」のやくざがどこでどんな悪事をやっているのかも全く見えてこない。ただ、言葉の上だけで、「チャイナ」ヤクザの行動が非難されているが、実は、西京連合の内部抗争の原因は後半からクライマックスにかけて見えてくる、そんな権力闘争の姿が、いかにも薄っぺらなところも、本作の難点だ。

これでは誰が見ても、鶴田浩二、高倉健、藤純子、高橋英樹らがカッコ良く魅せてくれた任侠道や、松方弘樹や菅原文太が印象付けた、実録ヤクザ路線の生々しさの味わいは、どこにも感じられないのでは・・・。

<このクライマックスはちょっと・・・>

料理はうまいし、フーテンで脳天気な女子高生サクラには優しいが、極道の「実務」とは一線を画し、意外に慎ましやかな極道の妻。それが本件前半で見せる黒谷友香演ずる極道の妻・鬼場琴音の姿だ。しかし、そのままラストまでいくわけではないから、それがいかに変身していくかが本作のテーマになる。しかし、そのか細い腕にドス（といっても小刀）を1本持っただけで、ピストルや大刀を持った大の男たちにいかに立ち向かうの？藤純子の女一匹での殴り込みには大いなる美学があったが、本作のクライマックスにみる琴音の女一匹での殴り込みは？たまたま停電になるもよし、たまたま雨が降り始めるのもよし、それは映画演出のテクニックとして当然認められるが、今時のヤクザの親分の家が、停電になれば懐中電灯を持って大の男が走り回らなければならないの？しかも、はじめて押し入った敵の家の中で、あんなにうまく隠れて一人一人殺していけるの？

琴音は、岩下志麻以来続いてきた極道の妻の目力を中心とした存在感を見せつけてくれるし、『極妻』名物の啖呵のセリフもきっちり決めてくれるから、16代目の『極妻』としては十分合格点。しかし、相棒役(?)のアザミのあまりにも浮いたセリフ回しがクライマックスまで続く上、男たちのバカさ加減はとて見られるものではない。これでは、あの『極妻』シリーズの復活は『キネマ旬報』6月下旬号における秋本氏の力説をもってしても無理なのでは。

そう思いつつ目をスクリーンから観客席に移すと、公開初日の土曜日であるにもかかわらず、観客は20人程度。せつかくの名シリーズだが、それを生かすも殺すも脚本次第、そして監督次第だと痛感！

2013（平